

# 「意味の色合いと度合い」 音声の研究と操作対象の拡張—消音・脱落・抑揚

音声による綿密と緩和の意味パレット：残像・記憶・意思疎通の保持と持続

久 部 和 彦

## はじめに

「意味の色合いと度合い」の具体的な論考の真の主題は、分子論的な言語教育指導への警鐘と、全体論的な言語ゲームの「総合性」や「複雑系的モメンタム」の是認が前提となる議論への肯定的関与に係わる。その上で、音声学で扱われる「抑揚」や「強勢」、「消音と脱落」、「同化と異化」、「音節と拍（モーラ）」、「重音省略（ハプロロジー）」等が、意味や理解および印象の全体像形成にどのような役割と「効力（フォース）」を担うかについて、ある種の「展望（Übersehen）」を与え、「見比べと見廻し」のみを終点として意識化し、語学を教育する際にありがちな「体系的付与手法」を柔軟に脱構築する必要性について論ずる。千変万化する「言語ゲームの網」の中で、「度合いや色合い」といった「程度や融合性の分布」を連想させるキーワードを用いて、理解の融合性や広がり、あるいは、意味付けの複層性等を意識化することも、研究の重要な課題であると言ってよいのかもしれない。音声面の「効力」の影響度を探り、意味に「度合い」といった「感じ方や深まり方」の分数的物差しを用いる意義とは、教室での少ない採集データから安易に一般化を導きだそうとする「小さな理論化の誘惑」に、強力に対抗するものである。繰り返すが、「研究方向性への言及」が意図する真の狙いは、疑似科学的な英語研究手法への批判的考察、及び、統計学的データ研究に値しない「都合のよいデータの組み合わせ」から引き出された「擬似法則的見解」に対する警鐘なのである。

## 1. 「展望（見比べ）後の記述を終点」とする言語世界透視術

「考えるな！見よ！」という象徴的な後期ヴィトゲンシュタインの警句を思い出してほしい。例示の記述を集め、束的な緩やかな「リゼンブランズ（類似性）」を「展望する」ことは、後期ヴィトゲンシュタインが最も重要視した研究の基本姿勢であることも想起してもらいたいのである。彼は、「家族的類似性（Family Resemblance）」という「類似という束」というフレームによる理解と意味付けの浮動性が「ある」ということを、初めて、直截に論じた言語哲学者である。その上で、微妙なニュアンスの意味解釈と音のコントロールの有用性の相互補完性、意図等を顕在的に演出するために極端な高低差を活用したピッチコントロール、意味の強弱という捉え方の問題、曖昧性を確保するための沈黙や間の利用、音型や抑揚の分類等を明示して意味と音声の関連性を議論すること等について、ある程度の「展望（見比べ）を終点にする」ことを重視するのである。私の研究視座は、こうしたヴィトゲンシュタイン的な見方に倣っている。コミュニケーションの意味理解の説明というものは、理論化には馴染まない。理論化や統計整理の手法を持ち込むのではなく、展望力を拡張するという視点こそがこの研究の意義でなのである。そうであればこそ、あえて、私は、研究者集団に以下のように語りかけるであろう。即ち、「辞書での短母音の語が、長母音化され、意味的には好感や賞賛を延伸する技量として変更される事例等を挙げろ！」、「挙げたら、記述と見比べに徹するように！」、「それを超えて理論化へ踏み出すな！」と。パターンや応用可能性について技量指導に含める優位性を序列化する作業や意義は重要であるが、その部分の矮小化を呼び込む理論化は、ニュアンスの複合性や融合性の「彩（綾）」を破壊し、混合性（カクテル）の度合いや、適用パレット間隔を割り切りすぎるため、融合共存部分を「感じさせる」ことにマイナスに働き、複雑に絡み合う意味の「混合的魅力」を「全体的に掌握するアンテナ」を狭めるというわけである。

## 2. 展望力と「束」的な「緩やかな単位」への仕分け

音声を利用する意味調節は「ある」のであるが、その綿密さや繊細さなどは、テキスト文字操作を超えた「複合技」に係わる点を是非とも強調しておきたい。微妙で変化に富んだ音や息の活用や省略などが、語用論の背景知の利用と組み合わせられ、音をコントロールする複合的な意識とでもいうべき技量の「総合性」に結集するのである。意思疎通の巧者は、本当はこうしたことを直感的には知っていると思われる。にもかかわらず、疑似科学的な研究断片の量産は広がるばかりである。コミカの優位性や恒常性の事象に編み込まれている真実とは、「総合性の操作力」であり、その「こと」は解明できる。但し、例示の束の見廻しが終点なのであり、説明の体系的な完結性の入手には程遠いということも「当然の帰結」なのである。こうした見方を、各教育現場で実践することで、「展望」の意義が学習者の意識に組み込まれるという「有用性」を付言したい。

### 3. 操作技量の「総合性」への集約論は所与の事実

例えば、シラブルのストレス強調の変形と抑揚ピッチコントロールの通常にないような振幅パターンを組み合わせさせた意味操作の印象付けという事象が存在するか否かと問われれば、それは正に存在するというのがフィールドの英語コミュニケーション観察の総体からは、当然自明の帰結であろうことが予想できる。15年も英語圏に生活すればそのような事象を何度も目にするのは必然であり、その存否については、フィールド言語学者が論証するまでもない「所与の事実」であることは論を待たない。また、これも所与の世界知であるが、意味理解には、受け手の世界像や背景知の「コネクティング度合いの総合性」とでも言える「ある種の総合化された言語操作感覚」が持ち込まれていないはずがない。このことも所与の事象として然りであろう。言語活動の成否や深まりの根幹に根ざすベースフレームとは、テキスト文字以外も含めた表情や抑揚などの全ツール活用型以外には考えにくいのであり、分子論的な操作を施す余地は極めて少ないと思われる。そこでは、範疇分けには馴染まない「総合操作力」が唯一の真実に昇格する。分子論的コミ論の研究者からは、挙って抵抗されることが必至であろう。

### 4. 意味の外延の拡張、「豊潤化」や境界横断的「融合性（クロス）」の許容

意味理解の外延の拡張とは、「色合い」や「度合い」という抽象概念を導入する。領域の分数的な意味の「交わり」や「広がり」、あるいは「溶け合い」や「複合的並存性」といった「豊かさ」の外延を広げることになるからで、AによりBという事象が生起するというような、疑似科学的な定式化議論には、当然ながら間逆の論調となり、また、定式図式化の意味定義を優先したい意味理解の単純集約型の教育手法とはますます疎遠になる。類似パターンを示す学習状況への説明行為はせいぜい現状の分類学でしかない。「Good!」のような辞書学的には短母音である通例を、あえて長音化の変形処理を施すことにより、意味の色合いや度合いを拡張する諸例には、法則化は馴染まない。ある種の「長さや高さの改造試行（変形）の多様性」が、日常会話のこの手の語使用には大量にみられるのであるから。そして、この短母音Goodの長音化用法は、法則やパターン化教育による一般化された図式伝授では、操作しにくい複雑さを帯びた領域の典型なのである。こうした事例に類似した多くの長音への変形によるポジティブな印象形成術は、語彙のボリューム感の意識化や、短母音の長音化リメイクに「音量的な厚み」や「上昇調のフラップ（弾み）」といったイントネーション（抑揚）効果を混ぜ合わせた混合体としての発話であり、状況や前後関係、個性や関係性などが絡み合って決まるため、パターン化では対処しきれないのである。意味のパレットの「伸縮」は、記述の＜束を＞増やして眺め廻す「比較理解」しかないのであり、理論化では追いつかないと見るべきであろう。それでも、音声学的な項目の操作変形力が意味理解のウィングを広げている「事実」については変わらず、その技量知を掘り起こし、「展望する（見比べる）」ことは有用である。

### おわりに 残像、記憶、意思疎通などの「概念の脱構築の必要性」について

最後に、私が残像と呼ぶものが、テレビを消した際に渦巻きのような映像の消え入る瞬間のようなイメージを指しているというのは正しくはない。そうではなく心像として持つ「残像印象」といったほうが正しいように思える。また、記憶という概念も「ある一点」を覚えているようなイメージは錯覚である。私が記憶と呼ぶものは、「ある程度の前後関係も含めた事象のまとめ」なのである。そして、意思疎通とは、ただ単に、言葉を掛け合うキャッチボールではなく、「納得度の了承」を含む「結論付け」なのである。こうした会話の「基底（サブストレイタム）」は、ジョン・ロックの三階層の認識ブロックを思い起こさせる。即ち、現象（フェノメノン）、実体/本質（サブスタンス）、そして基底（サブストレイタム）である。意味を成すとは、話者と周囲の関係性に於ける多層理解ブロック（ある程度の固まり）のどの部分が強く反映されているのかという総体意識調節の中にある。雲の中に見え隠れするテキスト記号の飛行を捉えるということは、その「裏に重なる層」が機能してこそ成り立つ。テキストは意味ではない。テキストを意味として切り取る難しさがあるからこそ、意味の把握や意味の落ち着きどころに関する研究も「見比べる必要性」に行き着く。教育手法の研究もこの見比べの巡回の「中」にあるのでなければならない。なるべく多くの特徴的な束やパターンを展望する作業を続けているうちは、言語が正しくゲームされているのである。理論の「柵」で遮断された場合は、この論考の警鐘を想起していただきたい。

#### 主要参考文献：

- Wittgenstein, L. *Remarks on Colour* Ed. G. E. M. Anscombe, Oxford: Basil Blackwell  
Wittgenstein, L. *Zettel* Oxford: Basil Blackwell  
Wittgenstein, L. *Philosophical Investigations* Oxford: Basil Blackwell